

女子大國文

第百五十三号

平成二十五年九月発行

女子大國文
第百五十三号

平成二十五年九月発行

京都女子大学国文学会

二〇一三年度公開講座 新撰朗詠集の魅力……………柳澤良一(一)	『栄花物語』の歴史叙述と願文……………大谷久美子(二三) ——藤原城子の叙述における願文利用の様相——	『老子道德経』古点の和訓語彙攷略……………西崎亨(四二)	『奥の細道』と白居易の「三月尽」……………新聞一美(三四)	彙報……………(三五)
------------------------------------	--	------------------------------	-------------------------------	-------------

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百五十三号

平成二十五年九月十五日 印刷
平成二十五年九月三十日 発行

〒605-8582 京都市東山区今熊野北日吉町五番地
編輯兼
発行者 京都女子大学国文学会

電話 〇七五-五二一九〇七六
FAX 〇七五-五二一九一二〇
振替 〇〇〇-五三一三四
〒603-8404 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所 西村印刷株式会社
電話 〇七五-四一四一〇八代
FAX 〇七五-四三二六二八二

彙報

研究室だより

○坂本信道先生が、本年三月末日を以て九州大学での国内研修を終了され、大学に戻ってこられました。

○替わって川島朋子先生が、四月一日より法政大学での一年間の国内研修に出ておられます。

○本年度の文学部国文学科主任兼国文学教室主任兼国文学会代表幹事は峯村至津子先生で、工藤哲夫先生・中前正志先生の兩運営委員と共に、学科・専攻・教室・学会の運営に当たっておられます。

○新しいリソグラフが学生研に設置されました。A3も鉛筆書きも写真も印刷できます。

○昨年度卒業生の皆さんより謝恩会の残金を寄付頂きました。有効に活用させて頂きます。

二〇一三年度国文学会行事（前期）

○新入会員オリエンテーション

四月四日（木）午後一時三〇分より 於J224教室

○優秀論文発表会

五月十一日（土）午後一時より 於J420教室

〈卒業論文〉

・『万葉集』巻五における

「子等を思ふ歌」について

堀川奈津子

— 憶良の作品に見る『維摩経』の思想 —

・『華嚴緣起』『元曉絵』第一巻の詞書について 福山久美子

— 『宋高僧伝』との比較 —

・鈴木三重吉『ぼッぽのお手帳』論 湊川 智世

— 〈家〉と〈女〉を中心に —

・〈長所〉と〈所長〉 北原 慈子

— 二字漢語の字順の反転に関する若干の考察 —

〈修士論文〉

・大江以言の詩文表現

田中 理子

— 「詩境」の語を中心に —

*発表会終了後、発表者を囲んでの楽しい茶話会が学生研で

開かれました。

○春季公開講座（大学と共催）

五月十七日（金）午後二時四十五分より 於J420教室

講題 新撰朗詠集の魅力

講師 金沢学院大学教授 柳 澤 良 一 氏

*学外の方々も多く来場され、一同先生の興味深いお話に聞き入りました。

○国文学会旅行（春季）

「京の〴〵」から本能寺跡へ―信長命日そぞろ歩き―

六月二日（日）午後一時三〇分～五時

行き先 六角堂・高松神明神社・紫織庵・亀龍院・本能寺跡

参加者 峯村・工藤・中前先生、学生二十五名。

*紫織庵ではご当主より懇切なご案内を頂戴し、亀龍院では特別に本尊の亀薬師像を拝観しました。

○新入会員歓迎 能楽鑑賞会

六月二十九日（土）午後一時より 於音楽棟二階演奏ホール

*観世流能楽師味方團先生をはじめ諸先生方（そのうち松井美樹先生は本学卒業生）のご協力を頂いて開催、着付けなどに関する解説を拝聴し、学生代表による小鼓・大鼓体験をはさんで、狂言「寝音曲」と能「橋弁慶」を鑑賞しました。

★各行事に参加した皆さんの感想文などは、後期分も含め次号にまとめて掲載いたします。乞御期待！

二〇二二年度 論文題目

修士論文

大江以言の詩文表現

—「詩境」の語を中心に—

後撰集の編纂意識

—古今集からの変遷—

田中 理子

戸田 有香

—現代キャラクター「ハローキティ」と比較して—
丑の刻参り考

—『平家物語剣巻』『鉄輪』に見える「鬼になる儀式」との関連性—
『隆房集』の伝本について

—第二種本の役割と重要性—

御伽草子『物くさ太郎』が目指すもの

『貴船の本地』における貴船明神像

—神の性格と利生を中心に—

『武家調味故実』論

—『四条流包丁書』との比較から—

『華嚴縁起』『元暁絵』第一巻の詞書について

—『宋高僧伝』との比較—

能順と芭蕉による発句奉納

—『とはじぐさ』の真相とは—

『のせ猿さうし』考

能「道成寺」の僧と女

大村由己の描く修羅能

—（柴田（北条）を中心に—

『あしびき』の稚児が担うもの

—恋と往生から見る聖と性—

櫻井 彩和子

塚本 笑美

徳永 彩乃

中嶋 加那子

中原 彩

福山 久美子

前田 恵里

南 知里

美濃 瑞希

宮崎 那津子

村松 萌香

卒業論文

中 世

稲荷御旅所説話における霊山について

『俵藤太物語』と園城寺

「総持寺縁起」の一考察—亀の報恩譚を中心に—

六角堂靈験譚

—『今昔物語集』巻十六第三十二話「隠形男依六角堂観音助顕身語」について—

能面の見手に与える効果

瓦井 里奈

土蜘蛛退治譚の「考察―山蜘蛛から土蜘蛛へ―

大脇由貴

井原西鶴『好色五人女』論

川上貴美

『平家物語』に描かれた女人往生

樹山英代

―巻一よりお夏の人物像を中心に―

『精進物魚類軍記』考

西村美帆

『好色五人女』巻一論

貴志遥

―『精進魚類物語』後続作品を通して―

―お夏の人物像と作品にもたらす影響―

近世

『伊勢物語』第五段の解釈について

天野晴香

『桃太郎発端説話』における雀の効果

小坂あゆみ

―「ついひぢ」の享受のされ方と「おとこ」の人物像をふまえて―

歌語「山姫」考―発生と展開―

稲垣裕佳

『心中天の網島』における叔母の説教について

齋藤里奈

王朝物語における黒髪の色彩表現

齊藤萌乃

―戒名の役割―

『萬葉集』二十二番歌「常娘子にて」考

鈴木奈於

『心中天の網島』考―おさんの存在意義について―

櫻間愛美

万葉集の「名告り」

吉村真衣子

『心中天の網島』における誓紙と文の役割

笹田あゆみ

―男女の「名告り」に対する意識の相違について―

近松世話物における「明暗」の工夫

池田憲古

『心中重井筒』論―近松が表現する季節の作用―

澤田栞

―『心中天網島』を中心に―

『桃太郎昔話』考

鶴川美樹

『心中天の網島』における親子の描かれ方―

田丸恵梨

―子ども達の思い描く「武士像」と桃太郎―

『卯月紅葉』考―お亀の心の色と緋縮緬について―

大館春菜

草双紙『魚鳥あんばいよし』の刊行年と工夫

堂上智子

『義経千本桜』四段目考

大場美穂

近松世話物における遊戯の効果について

友田園子

―四段目の孤忠信像について―

黄表紙『五人切西瓜斬売』考

中尾愛

—物語に取り入れられた工夫—

青本『義仲一代記』の木曾義仲像

『桜姫東文章』考

—桜姫の人物像と作品にもたらす効果—

黄表紙『千秋楽鼠の姫人』考

—鼠の嫁入り絵本の流れの中で—

近松心中物から見る、当時の人々の仏教観とその効果

安野 英里

読本『優雲華物語』における残酷な場面の意義について

—「真袖殺し」を中心に—

式亭三馬『酩酊気質』考

—町人文化や世相を反映した作風について—

喃本にみる『義経千本桜』—パロディの方法—

菅専助『桂川連理柵』論

—『曽根崎模様』との比較を通して—

『心中刃は水の朔日』考—小かんの心情を中心に—

黄表紙『御存商売物』における工夫

—出版事情の取り込みについて—

『化物一代記』における伊庭可笑の工夫

近松世話物『女殺油地獄』考—与兵衛を中心に—

『南総里見八犬伝』考

—馬琴の演劇的演出における趣向—

近松『松風村雨束帯鑑』における能・狂言の取り込み方

—「心中天の網島」を中心に—

近松世話物における一分について

—「心中天の網島」を中心に—

近松世話物の「異見事」の場における遺言の役割

—「心中天の網島」を中心に—

近 代

「山月記」論—変身について—

尾崎翠「琉璃玉の耳輪」と無声映画の共通点

—アラ・ナヂモグ「サロメ」を中心に—

川端康成の作品における植物への転生

—「抒情歌」を中心に—

遠藤周作作品の中に潜む象徴性

—ガストンが登場する三作品について—

芥川龍之介と今昔物語

—「羅生門」から「偷盗」へ—

漱石の思想—「硝子戸の中」を軸に—

西 川 幸

藤 井 彩

山 口 稚 加

山 崎 由 貴

安 倉 萌 理

伊 藤 美 成

遠 藤 和 佳

岡 地 加 津 美

笠 野 智 子

堅 田 美 樹

向田邦子の描く父親像の変化と秘密

川崎 千尋

梶井基次郎特有の表現方法について

安野 詠美

―「父の詫び状」を中心に―

太宰治〈女性独白体〉の意味

阪本 菜奈

―分身・分裂表現を中心に―
松谷みよ子「モモちゃんとアカネちゃん」シリーズについて

高村光太郎の求めた智恵子―妻の死の受けとめ方―

島津 茜

山崎 美和子

堀辰雄の描く女性像―節子と菜穂子について―

鈴木 美妃

壺井栄と「二十四の瞳」の「おなご先生」

大石真作品における〈子ども〉と〈大人〉の対立から見るそれぞれの群像

江戸川乱歩「鏡地獄」論

湯浅 萌

―「チョコレート戦争」と「教室二〇五号」を中心に―

―「彼」は地獄で何を見たか―

吉岡 夏美

「悟浄出世」「悟浄歎異」と「西遊記」

谷 治 美帆

「山男の四月」考―獲物の価値の違いについて―

黒田 菜月

―相違点とその理由―

「神と宇宙と淫慾と」論

阿部 瞳子

太宰治「皮膚と心」論

寺田 佳苗

林芙美子「浮雲」論

阿部 容子

―「ボブリー夫人」との比較―

―富岡とゆき子の関係性の再評価―

安西 汐梨

吉本ばなな「哀しい予感」論

手良脇 梨津子

「それから」論―鏡に向かう代助―

井上 亜沙美

上橋菜穂子「守り人」シリーズで描かれる文化変容

永崎 由莉

坂口安吾作品におけるモデル問題

井上 亜沙美

―「ヤク」と「ヨゴ」を中心に―

―「外科室」論―小石川植物園に関する考察―

井上 智美

森絵都「宇宙のみなし」論

中村 優希

中島敦「名人伝」考

川越 陽子

「夢十夜」の「第一夜」を考える―「女」の正体―

永吉 美輝

―「悟浄出世」から見る「名人伝」―

岸田 紘子

鈴木三重吉「ぼッぽのお手帳」論

橋岡 奈月

「天守物語」における人界から魔界への越境

多田 麻衣子

―〈家〉と〈女〉を中心に―

坂口安吾「桜の森の満開の下」論

多田 麻衣子

少年探偵団シリーズにおける人物観

桃井 唯華

―花びらと化す女について―

太宰治「駄込み訴へ」——小鳥の正体について——

太宰治「トカトントン」論

——若い中尉の言動の意味——

泉鏡花「予備兵」論

——主人公清澄の人物像とその効果——

樋口一葉「この子」論

——教訓論の否定の可能性について——

泉鏡花の描く幻想空間とその効果

——「龍潭譚」を通して——

小川未明「赤い蠟燭と人魚」論

——大人に向けた児童文学——

泉鏡花「鐘舌夜半録」論

泉鏡花「外科室」論

——作品内における娘の重要性——

漢文

『源氏物語』における琴きんの琴について

——その伝承と継承権——

『源氏物語』における花散里の人物像

『伊勢物語』第八十二段と仙境

塚本 紗貴子

中村 祥子

南都 葉月

原 有希

古市 愛純

宮城 夏希

森崎 まや

宮田 柚衣

牛居 ゆり

岡島 紫方

奥野 敬子

——天の河をめぐる——

『源氏物語』「花宴」における扇の役割

『菅家後集』にみえる菅原道真の心情と表現について

『方丈記』が持つ仙境性

——『桃花源記』が日本文学に与えた影響——

中島敦『山月記』について

——『人虎伝』と『月に吠える』との関わり——

『列女伝』と『源氏物語』との関わりについて

月と桂の関係性——『源氏物語』松風巻より——

菅原道真の詩と政治的立場

——「詩人無用論」を通して——

『堤中納言物語』における『源氏物語』の受容

平安時代の文学における「月を忌む」ことについて

『万葉集』巻五における「子等を思ふ歌」について

——憶良の作品にみる『維摩経』の思想——

『源氏物語』における空蟬の人物造型

紀長谷雄「白石先生伝」における神仙表現について

岸本 由樹子

久保 友紀子

小牧 沙有

坂本 麗

白石 千子

城内 瑞紀

鋤柄 実莉

藤本 桃子

星 美早紀

堀川 奈津子

森田 彩弥加

吉野 圭南

国語学

「テヨダワことば」にみる人間像

—『門』のお米の場合—

源氏物語古注釈所引『遊仙窟』

「我」字の訓—『万葉集』の場合—

円地文子 of 色彩表現について

—「白」と「黒」の場合—

〈長所〉と〈所長〉

—二字漢語の字順の反転に関する若干の考察—

音訳語の読みと表記

—明治期における音訳語の漢字表記と音—

女性の使用する終助詞「ぜ」について

—江戸時代の洒落本・人情本を中心に—

明治期における「普通」と「尋常」

文字情報としての言語景観

表記のゆれ—「激」と「劇」—

「お世辞」と「おべっか」

「その意味違うんじゃないですか？」

—『現代日本語書き言葉コーパス』少納言を用いた意味分析—

伊東 凜香

梅田 千佳

大松 悠香

川戸 優美子

北原 慈子

小谷 梨穂

佐々木 萌

志貴 香里

上保 芙記子

新庄 美佐子

滝尻 翔子

福井 里子

「ホーキョク」と「ホーギョク」

—ガ行鼻音の衰退の現状—

「うたたね」の語誌

意味変化を起こした「やばい」

—「やばい」の用いられ方と評価する時間—

「なでしこ」誌

若者ことばにみるポライトネス

—あいまい表現のはたらき—

葬送語彙の消長

—奈良県桜井市旧上之郷地区の葬送語彙を中心に—

児童文学のオノマトペ

敬語について

—京都女子大学文学部国文学学生へのアンケートをもとに—

時制を表すTwitter語の意味と使用法

—用例分析をもとに—

小学生高学年の敬語力

—小学校高学年へのアンケート調査から—

石川県の方言—現代の若者の方言使用について—

三都のことばの認識率

—京都女子大学生へのアンケートから—

宝 玉 ゆう子

松下 萌子

森 下 幸

稲 富 愛美

東 元 育 愛

藤 井 亜 記

秋 野 共 香

安 部 薫

薄 永 彩 花

岡 島 麻 衣

奥 村 美 咲

川 瀬 ひ と み

『女子大國文』 投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。

- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたもの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

六、(投稿先)

投稿先は以下の通り。

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、

採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。

② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

大谷俊太・坂本信道・新間一美・田上 稔

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読の結果を報告、審議の結果、三点が掲載となりました。また、柳澤良一先生に公開講座での御講演内容をご寄稿賜りました。記して深謝申し上げます。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(大谷・中前)